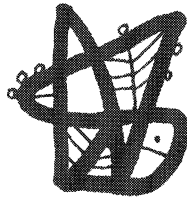


学生相談室からみた現代の学生



桐山 雅子

中部大学講師
学生相談室カウンセラー

□ はじめに

学生への批判

最近の学生に対する評価の中には、批判の域を出て戸惑い、呆れ、諦めといったものもないわけではない。かつての三無主義（無主義、無気力、無関心、無感動）、モラトリアム人間、ピーターパン・シンдрロウム等々は青年としての生き方に関する指摘であったが、新人類に始まる現在のそれは、何を考えているのかわからない、子どもっぽい、常識が欠けている、自分の考えを表現できないなど、青年の未熟さに関するものが目立つ

ように思う。

筆者のような仕事をしていると「どんな学生が相談室に来ますか？」と、たずねられることが多い。以前は大方の人がイメージするような、無口で暗い印象の学生が多かったが、今は、面接中に冗談をいって笑わせてくれる学生もいる。また、高校はもちろん予備校にまで相談室がある時代になってきているので、カウンセリングについての理解も進み、積極的に自分の問題に取り組みたいとテーマをきめ定期的に相談する学生もいる。

青年の真剣さ

一年生の男子学生三人組がふらりとやっ
てきたことがある。茶髪と金色のピアス
といった派手な格好で、一人は眉を剃り弓型の眉を描いて
いたのにはさすがにびっくりしてしまった。姿勢も悪く、
言葉も子どもっぽく、悩みや相談とは縁のないような印象
であった。「ここへは、どういう人が来るの？」などと友
だちのように聞かれて十分ほど話しているうちに、一人が
「しゃべっているうちに俺にも、悩みがあるような気がし
てきた。また改めて来ていいですか」といいたした。その
頃には彼らの姿勢から、顔つきまで引き締まって、青年ら
しい真面目さが表面に漂ってきたことが印象的であった。
次回、正式に相談室を訪れた時の彼は外見は同じでも印象
がまったく異なり、真剣に将来を考えるわれわれの見慣れ
た青年の顔つきと態度をしていた。外見で学生を決めつけ



きりやま・まさこ ●一九四六年愛知
県生まれ ●学生相談室に所属 ●専攻
は臨床心理学 ●主な著書（共著）に
『人のこころ人のからだ』（ミネル
ヴァ書房）『発達と教育の心理学』
（協同出版）『日本の教育力』（金
子書房）『新・子どもの心理』（福
村出版）など。

てはいけない。一見悩みとは関係のなさそうな青年も、機
会に恵まれれば真剣に考えることを求めているのだと改め
て肝に命じた次第である。

悩む土壌の欠如

「悩むこと」に価値のあった一時代前
と異なり、現代は真剣に考えたり悩ん
だりする土壌が整っていない時代である。社会全般に、迷
い、悩み、考えるといった直接役に立たないことを軽んじ、
能率や結果を重んじる風潮がある。そのことが青年期の生
き方を難しくしており、「くよくよするより、勉強しろ」
といわれて育ってきた若者達だけ責めることは片手落ち
の感がある。こういった社会への指摘は既にさまざまなか
らでいわれ続けてきているが、今大切なことはこういった中
で育ってきた学生にレットテルをはり分類することではな
く、どう教育し、どう支援するかという議論である。

ここでは事例を掲げつつ、学生の姿の断片と、青年期を
生きる彼らの課題を具体的に考えてみたい。

㊦ 今日的な青年期の課題

青年期の 発達課題

青年期は従来は子どもからおとなへの移行
期、性的な成熟の開始から経済的独立や結婚
にいたるまでの不安定な中間期と考えられて

いた。しかし、社会が複雑になるにしたがつて、青年がおとなになる過程も複雑になってきている。性的発達の前傾化と青年期延長により、青年期が長くなり、始期と終期を特定することも難しくなってきた。青年期に入るまでの個々人の発達のばらつきも大きい。現在の青年期は単なる過渡期というより、青年期としての独自性が注目されるようになってきている。

ライフサイクル上の青年期の課題については、エリクソンのアイデンティティ理論をはじめとし、多くの理論がある。それについては紙面の関係上ここでは触れないので、青年心理またはライフサイクルについての文献を参照していただきたい。いずれにしてもこの時期は、感覚、知性、感情、身体のすべての領域で急激な成熟が見られると同時に、自己を確立し始め、社会との接触が始まり、社会的人間としての基礎を完成するという、課題に満ちた時代である。

育っていること いないこと

大学時代は、青年期の後期に当たる時代とされている。おとなに守られた子ども時代から自立した社会人としての成人期にはいつていく過程で、先に触れたようなさまざまな課題を解決していかなければならない。これは社会や時

代の差を比較的受けない普遍的な青年期の姿である。

他方、今日大学の中で「最近の学生は、以前とはちよつと違う」というかたちで、教職員にある種の戸惑いを抱かせる青年については、日本の社会という分脈の中で考えねばならない問題である。先に「おとなに守られた子ども時代」と書いたが、いじめや不登校、乳幼児虐待（このようなことは、日本にはまず起こらないといふ最近まで思われていたことである）など、学校や家庭での問題が増加していることを考えると、「守られた子ども時代」を現代の青年が過ごしてきたかどうかという前提から考え直さなければならぬ。幼児期から続く受験や管理の中、大学の門にたどりつくまでにどのような体験をし、どのような自分を築いてきたかを考慮にいれなければならない。そう考える時、現代の青年の歩みはさまざまである。育っていることと、育っていないことを確認し、育っていないことを育てる作業を、この時期にはとりあえずしなければならない。

自分の課題への 挑戦

大学生活を振り返って「サークル活動が一番有意義だった」という学生がいた。それを聞いたある先生は、「勉強もしないでサークル活動に熱中していたとは、親に高い学費を払ってもらって何を考えているのか。また、そのよう

な教育しか提供できないとすれば、大学に携わるものとして情けない」と思ったという。しかしその学生は、小学校から塾通いや部活に追われ、友だちと自由な交流をしたことがなかったという。大学に入って初めて友人とふれ合う経験をし、その体験を通して自分に自信がもてるようになり、将来に希望を持つようになったというのである。彼にとつてのサークル活動は、楽しみ以上のもの、自分の将来の生き方に関わる重大事であった。

同じような文脈で、就職後「大学で学んだことよりも、バイト先で教えられたことが一番役にたった」と語る学生もいる。大学に関わるものにとつては淋しい気がしないでもないが、彼にとつてそれまで未開拓の課題との取り組みが幸いにもバイト先で満たされ、それによって安心して社会人として踏み出すことができたということであろう。

それぞれの学生により、異なる課題に挑戦する（しなればならない）時代、それが現代の青年期の姿である。

積み残し課題への 取り組み

大学というモラトリアムを保証された時間帯は、次の成人期へ向けての共通の課題に取り組みつつ、個人のそれまでの育ちの中で欠けていた、もしくは十分な発達をしてこなかった課題と改めて取り組みにはまたとない場で

ある。こういった積み残し課題への取り組みは、それ以前の段階でも、節目ごとに絶えずおこなわれてきている。順調にきた人もいるし、いろいろな意味のつまづきを体験してきた人もいる。例えば、小・中学校の不適応のもとに不安定な母子関係があったり、思春期の友人関係のトラブルのもとに、自我の育ちや人間関係での体験の乏しさがあつたりする。

大学に入ってきた学生は、その意味ではその時その時の発達課題を一応乗り越えてきた人たちである。しかし、最近では児童期の心の傷が癒されなままとか、いじめられた経験などから人間不信に陥つたまま、青年期の共通課題である、人と親密な関係を結ぶことができないという学生も少なくない。積み残し課題の重さに耐えつつ、必死の思いで何とか大学の門までたどりついたが、「これから、どうしてよいかわからない」という学生も多い。

それぞれの発達段階での積み残し課題が、それ以上歩み続けるには大き過ぎるとき、各種の身体症状、精神症状として表現される。これは大学生でも同様で、友人関係や他の活動の中で多少のトラブルは感じながらも基本的には自力で乗り越えていく人もいれば、頭痛等の身体症状やうつ的な精神症状を訴え、相談室やクリニクを利用しつつ解

決していく人もいる。ここでは、いくつかの具体的な事例をとおして、現代の学生の生きる姿の一端を紹介したいと思う。いささか寄せ集めの感はあるが、通常ではなかなか表に出ない、学生個人の内面を多少なりとも紹介できればと思っており、基本的には健康な学生の例である。

Ⅲ 具体的な学生像

管理教育の影響

管理への慣れ

大学に入ってきた学生がまず戸惑うのは、大学では誰も何も指示してくれないことである。高校までの生活は規則や管理が多く、反発しつつも彼らは人生の半分以上をその中で生活してきた。たとえば学校に書類を提出するといった場合でも、担任の先生が見直しをしてくれるので、下書きを何枚も書かされたりと面倒なこともあるが、最終的な責任を取ることがない。クラスも席も固定しているし、仲間外れにならないような班活動もあるので、積極的に友だちを探す努力をしなくても普通にしていれば困ることはない。高校までの学校生活には自分で考え、決め、行動し、責任を取るという範囲がほとんどないのが現状である。等々例をあげれば

きりがないが、規則や管理、干渉が多い高校までの生活に疑問をもたず適応してきた人こそ、大学にはいると戸惑うことが多いし、居場所がない。居場所は自分でつくるものではなく、既にあるものに順応する方が安全という長い年月を過ごしてきた青年もいる。こういったことは個々の学生を批判しても始まらないことで、高校までの学校教育や親の育て方の問題である。

ある新入生

対人関係と学業に問題があると自発的に来談した入学直後の学生がいた。彼は小さい時から無理に友だちを作ろうとしたので、人間関係が楽しくないという。中学では人と話すと頭痛がし、高校ではいつも疲れていたという。

大学に入り急に一人になったが、人に話しかけるのが億劫で、怖くて、挨拶程度で終わってしまうという。「中学の頃から、人の前だと緊張し身構えてしまい、言葉が出てこない。どうも他人は信用できない。勉強のみこみが悪く不器用で大学の先生にも叱られている。でも自分はそそっかしいから、一人ではやっていけないと思う」という。父親は真面目な仕事一途の人で家では話をしないという。母親はやさしいということだが、過保護な印象も受けただ。全般的に発達の未熟性が目立ったが、基本的には健康

な学生であり、これからの四年間の生活の中でどのように未分化の発達課題を達成していくかがテーマであると判断した。「今までのように金魚の糞みたいに力のある友だちについていくのはいやだ」というので、「これまでうまくできたことがないと後ろ向きに考えるのでなく、大学生になって新しい環境の中で、なにごとともチャレンジだと思つてやってみたら」と提案すると、その言葉が気に入ったらしく「チャレンジですね」と繰り返していた。

キャンパスの中にはこのように、自我が未確立で頼りない印象の学生が存在する。彼らの今現在の姿を固定的に考えるのでなく、彼らの内にある成長や変化への欲求に注目したいと思う。

自立への
健康な学生に関していえば、助言や、いわゆる
励ましの言葉、本人のプラスの面を肯定する
ステップ
る言葉がすつと入っていつて、一時的にしろ

力になることが最近の学生の特徴である。

助言に関しては、高校までの生活の中でいつもおとなに方向を示してもらつて動いてきた結果であろうか。自分で決定し行動する前段階として、一時期自分の考えを保証して欲しい気持ちがあるようである。例えば、宗教やサークルの勧誘、金銭のトラブルなどで相談に来る学生の多くは、

断わるしかなくことを相談に来る前に既に自分で決めていくことが多い。筆者はあいづちをうつつ聞き、最後に「どうするかは決めておようね」と保証するだけということもある。彼らは話し終えると明るい顔をして相談室を出ていき、実際に問題を解決することができる。

「何を話しに来たかわからない」といった学生の中にこういった自己決定への移行のステップを踏み出すときに、とりあえず誰かの保証を求めに来るタイプがある。また、「言われればすつと動けるんだけど、一人だと何もできない」と言つて、細かなことで先生の研究室へ助言を求めに通っている学生もいる。自分で決定し行動する訓練のできていない学生には、過渡期にこのようなステップが必要なのであろう。

プラスの面を肯定し励ますことはいつでもできることではない。しかし、「ほめて育てる」ことが強調される児童期を過ぎて受験中心の中学高校時代になると、自分の事を人にほめられたり認められた経験のほとんどない、むしろ根っここの所で否定されながらも必死に育つてきた学生も多い。大学の先生は学生にとつて権威のある人であるので、単純な話だが、先生にほめられ認められる体験は学生の自尊心を高めに高め、未来を明るくするものである。

人間関係

気持ちの
わからなさ

最近の若者の特徴として「傷つくこと、傷つけることへの恐れ」とそれによる人間関係の希薄さがいわれている。大学の先生との関わりでも、アンケートを取ると「よい関係をつくりたい」と答えるつも、学生の方が近寄ってこない場合も多い。

就職、単位その他で動いてもらった後でも、先生の所に報告に行かない学生がいる。「ちゃんと報告に行っていない」と先生もその後どうなったか心配していらつしやるはずだから」というと、「そうですか」と意外な顔をす。 「心配してもらっていると思わなかった？」と聞くと、うなずいて「思わなかった」という。重ねて「心配してくださっているとしよう」というと、今度はやっぱりそうかと納得をして、報告に行く。ここで気になるのは、「先生も心配していると思う」と一言いうと、学生がすんなり納得する事である。その方が、彼らにとってよくわかる心情なのだが、さまざまな事情で彼らは、報告に行くという素朴な行動をとらないでいる。

学生の方は、「自分のごときものの些細なことで、時間を取ってもらっては申し訳ない」「用のあるときは、先生

から呼び出しがあるはず」「先生のところへ行くのは、何かトラブルのある時。ふらりと話に行くなんて考えられない」というようなことをいう。

「大学の先生なんて変人なんだときいているから近寄りたくない」という学生もいる。自分の経験によって知ったことでなく、外から得た知識をそのまま信じて行動している学生もいる。大学という場は、既にインプットされている知識を実際に試して自分のものにしていく時代でもあるので、四年間の経験の質や量によって学生はずいぶんと変わっていく。

人間不信と

自己不信

もう少し厄介なのは、基のところ人間不信があつて、人や自分が信じられないタイプである。ある時、人間関係が苦手ですらいと学生相談室にやってきた学生がいた。話をきくと子ども頃からいじめられやすく、楽しくない小学校時代を過ごしたという。担任の先生に相談にいったところ、「いじめめる方が悪いが、人づきあいが悪いのはお前にも責任がある」といわれた。自分にも悪いところがあるなら治したいと思ひ、どこが悪いかをきくと、「自分で考えなさい」といわれ、一生懸命考えたがわからなかったというのである。先生の対応が不適切であったのに、その後の彼はずっと

自分の性格や対人関係のもちかたに問題があると悩んできた。中学高校ではいじめられることもなくなったが、何かのおりに先生の言葉を思い出し、自分に自信がなくなり、ますます人間関係がうまくいかなくなってしまっていた。

最近学生相談室に来談する学生の中に、小中学校で仲間外れにされたり、親や教師の不適切な対応による心の傷を持つ人がふえてきている。人間関係のバリエーションを練習する児童期、思春期に、仲間から拒否され、それ以上の被害を被らないために閉じこもって窮屈な生き方をしてきた人たちである。彼の場合はその後恐る恐る人間関係を踏み込んで来ているが、児童期の経験不足と、ひよっとして裏切られるのではないかといった他人への不信任、そのような自分への自信のなさは、人間関係に問題を抱えてきた人に共通するものである。

果てしない 「人間関係に疲れる」という訴えも多い。

気づかい なぜ疲れるかという点、相手が何を思っているかよくわからないので、自分の言葉や

態度で相手を傷つけてしまったのではないかと、外に表われないが相手は内心怒っているのではないかと、自分はグループの中で浮いているのではないかといろいろ考え、傷つき、終わりのない渦巻きに飲み込まれてしまうからであ

る。互いの気持ちの交流がなく、勝手に一人で考えるので、悩むし、怖いし、わずらわしいし、避けたくないのである。「だけど、一人じゃ寂しい」と彼らはいう。先生やおとなに対しても同様で、相手の気持ちが読めないで、動けなくなってしまうている。

人の気持ちに沿うように生きてきたある学生に「あなたはと思うの？」と聞いたことがある。彼は驚いた表情をし「ずっと人の気持ちばかり考えてきたので、僕の気持ちと聞かれても……。そんなこと考えたことないから……。わかりません」といって、黙ってしまった。そして、それが転機となつて、自己洞察が進んでいった。「最近の学生は返事をしない」「はつきり自分の気持ちをいわない」という場合なども、彼らには彼らなりのワケがある場合が多いようである。学生が理解できないと感じた場合は時間をかけて、評価をせずに聞くと、意外な心情がわかって驚いたり、納得させられたりということがある。

関係を築く

親子関係が基の所で不安定なままの学生もいる。こういった学生は他人がなかなか信用できないので、深い人間関係が築けずに苦しんでいる。一番身近でつきあいの長い親の姿が見えないのであるから、他人のことがわからないのは当然である。こういった

学生に共通する点は、人に自分の気持ちを察してもらった経験が不足しているため、人の気持ちを理解するとか、わかるといった概念が本当の意味で確立していないことである。そのため、相手のある分野に根がおろせず、いつも不安を抱え緊張している。

コミュニケーション能力は、発達のそれぞれの段階で年齢にあつた人間関係を積み重ね、親子関係、家族関係、友だち関係へと広がってはじめて身につけてくるものである。この根の育ち具合に個人差があり、先に述べたように親子関係の根も充分育っていない場合もあるので、発達段階を戻して、人の気持ちをこう理解したがやっぱりそうだったとか、聞いてみたら違っていたとかいった直接体験がいろいろなバリエーションで何度も繰り返される必要がある。自分の気持ちを人に理解してもらったという体験は、その土台である。大学での教職員と学生のコミュニケーションは、伝達などを目的とした直線的なものになりやすい。大学全体を一つのコミュニティと考え、日常的な関わりの中で学生の人間関係能力を育てていく姿勢が求められている。

単一価値から多面的価値へ

偏差値づけからの脱却

大学入試の際に学生たちは全国の大学の偏差値の一覧表にであう。日本中の大学がランク付けされており、あの表を見ると一点でも高い大学に入らないと自分の価値が下げられるような錯覚に陥ってしまう。そして、難しい大学、実力程度の大学、滑り止めの大学を受験するのであるから、どの大学にも、自分の大学に入学したことを不本意に思う学生がいる。多少極端な言い方をすれば、大学に入学したことに、「満足」「一応満足」「不満」それぞれ三分の一ぐらいの割合になっている。少なからぬ学生にとつて、この不本意さと闘い、自己価値を維持し、新たな目標をつくっていくことが大学生活での課題になっている。

ある学生は「自分は今の大学に入つて満足しているのだが、親がおめでとうといつてくれなかった」という心の傷を持つている。また、「人生のスタート地点で負けてしまった」と思い込んで立ち上がれない学生もいる。時にはこの問題を引きずったまま留年を繰り返す学生もいる。

こういった問題は、表面的には適応している学生にも触れられたくない深い心の傷として残り、自分自身への基本的な信頼感を根こそぎにされたような脅威となつていくことがある。偏差値一辺倒の単一価値観にとっぴりつかり、

受験と闘ってきたのであるから、その結果が本意となれば、自信がなくなってしまうのは当然であろう。「自分には自慢できるものが何もない」「勉強もできないし、運動もできないし、明るくもない」といった画一的な能力主義や価値観を崩し、さまざまな価値に初めて出会えるところが大学なのである。そういったさまざまな価値をわれわれが提供しているかどうかとも問われるところである。

直接的な支援

今の学生はバイトや遊びに精を出し勉強をしないとわかれていくが、社会に出て通用する力量を身につけたい、自分自身を成長させたいという思いを抱いている学生も多い。このとき、自分で行動し希望を実現できる学生もいるが、与えられることに慣れてきた学生の中には、気持ちがあっても受け身的だったり、やりたいことの探し方のわからない学生もいる。こういった面では、具体的な情報提供や支援が必要であろう。

常識の学習

私語

授業中の私語に困っておられる先生も多いと思う。「以前はこちらがしばらく黙っていたら学生の方も察して静かになったものだが、この頃は黙っていたとしても静かにならない。どうなっているのか」というよ

うな話も聞く。そんな学生ばかりかというところでもなく、学生相談室に来る学生には私語迷惑派が多い。授業の声が聞こえない、注意をしない先生に腹が立つ、こんな程度の大学へ来てしまったのかと情けないと訴える。彼らは、先生が本気で私語を困ると思うなら叱りつけるなり、教室を出すなり断固たる処置をするはずだと思っている。それをしていないのは、結局は私語を認めているのであり、学生に多くを期待していないからだという。教師の方には、学生なら教師の気持ちもわかるだろうという期待があるし、学生の方には、期待しているのなら注意をするはずだというのがある。ここには双方の常識のズレがある。

レポートの提出期限なども同様である。提出期限を守ってほしいと思うなら、強調して何度も伝え、断固たる態度をとらなければならぬ。そしてはじめて学生は、あの先生の提出期限は守らなければならぬと学習するのである。こういった意味では現代の学生は、相手の態度に敏感に反応している。

知らないことは

教えよう

挨拶の仕方から、報告の仕方、電話の対応等々、研究室に入ってきてきて身近になった学生の常識不足は、目に余る場合もあるかもしれない。本来こういったことは、家庭や社

会の日常場面で子どもの頃から徐々に教えられ学んでいくことである。以前ならば当然身に付けていると思われる常識を学んできていない多くの学生がいる。だから、バイト先で役に立つことをたくさん学ぶ学生もいるのである。

しかし、このことに關しての若者の未熟さは、教えられるすむことであるから大きな問題ではない。教える場が大学にまで延長したまでのことである。ほとんどの学生は、プライドを傷つけられることさえなければ、教えられればその分吸収し育っていく。大学生なのだから知っているはずと思わず、気づいたことは教えたり注意したりする手間暇かけた人間教育が大学でも求められてきている。

四 発達援助の場としての大学

現代の学生の姿の断片を身近な例として
おとなへの道 あげてきた。そして発達段階での未熟性を

をかかえながらも、人として本来的に持っている成長意欲を実現しようと悩み、考え、行動する彼らの内面をわずかではあるが紹介してきた。

大学生という一般的なには、「もうおとなのはず」という感覚がある。しかし、もともと青年期は過渡期であり、子どもでもなければおとなでもない時期であるという原点

に戻りたいと思う。青年期の区分には各説があるが、身体的に変化をしていく小学校高学年から中学校までを青年前期、高校時代を青年期中期、大学生から二十代半ば以降までを青年期後期と位置づけることが一般的かと思う。しかし、最近の高校の様子や学生たちが高校までに経験してきたことの質や量を考えると、青年期中期の課題に手をつけないままに大学に入ってきている学生も多いのが現状である。少なくとも大学の前半二年間というのは、青年期後期ではなく中期に相当し、それに見合った教育や支援が、大学全体の取り組みとして求められる時代になっているといえるのではないだろうか。

新しい時代に応じた 生きる力

欠点は目立つものであるが、発想を変えプラス思考で考えると、昔の学生にはない最近の学生のよいところ、頼もしいところを見つけることができる。たとえば、豊かな時代に育ったゆとりや素直さ清潔さ、ありあまる物や情報の中から必要なものを選び要らない物を捨てる能力、生活を楽しむ能力、自分らしく生きようとする姿勢、変動の激しい社会を生き抜いていくために必要な柔軟さ等々。豊かで平和な時代にふさわしく、多くの学生は健康で目的のある生活を送っている。人間関係に問題を持つ若

者は確かに多いが、一方で広く仲間を持ち、お互いに影響しあって自己の成長をめざしている若者も大勢いる。現象的な特徴にのみ目をむけ、批判を重ねるような構えでは、時代に応じた彼らの生き方の良さが見えてこない。

人がおとなになっていく道はもともと、個別のペースでゆっくり進んでいくことが望ましい。普通列車に乗り、気に入った駅に降り、その辺りの町を歩いて、納得したら再び列車に乗り旅を続けるのが理想である。現代の子どものたちは、大学の門までは特急列車でやってくる。「ひかれたレールの上をひたすら走ってきた」とはよく言われる言葉であるが、「僕は、何時何分にどこの駅につき、何分停車で何時何分発車まで全部決まっていた」という学生もいる。目標を目指して、わきめもふらずに走ってきた学生にとって、大学キャンパスは、はじめて自分で決断し、行動することを許された場である。従来の特典的知識の修得の場に加えて、四年間というまとまりをもった人間教育の場、成長援助の場として大学全体が位置づけられている。それによって、学生に関わる教員、職員の役割も変わってきているということを、大学全体の課題としてとらえるべき時期にきているのではないだろうか。